

翻 訳

インドネシア華文詩人・寒川（呂紀葆）の インドネシア華文文学の発展に対する貢献

(2015年6月16日・6月17日にインドネシア華字紙『印華日報』に掲載された文章をもとに)

“The Chinese Poet HAN CHUAN”

(from The Article of the Newspaper Harian InHua, 16 and 17 Jun 2015.)

合 田 美 穂

- 1, 翻訳にあたって
- 2, インドネシアの媚ともよばれる寒川によるインドネシア文芸への支援
- 3, 文学のための苦心と労力——寒川の印象を記して
- 4, 寒川とインドネシアの作家仲間との苦難を共に
- 5, 友誼・気心・辛苦から見える道筋—寒川と作家仲間が乗り越えてきた苦難
- 6, 長く記憶に留めおくべきインドネシア華文史書の功労者—寒川—
インドネシア華文作家協会成立十周年に思いを馳せて

1, 翻訳にあたって

このたび、本稿を翻訳することに至った学術的意義は、大きく分けて3点ある。本稿における寒川（本名は呂紀葆）は、東南アジアを代表するシンガポール国籍の華文詩人であり、また作家でもある人物である。彼はこれまで多くの文芸作品を残しており、東南アジアの「華文文壇」の中では高い知名度を有する人物である。

日本では、中国語による文学作品や詩といえば、主に中国大陸や台湾のものが数多く紹介されており、作家や詩人も中国出身者が注目される傾向が比較的強い。それ以外の地域の華文作家または詩人、および彼らの作品は日本ではほとんど紹介されていない。そのため、この人物及び作品を日本に紹介することで、東南アジアの華文作品および詩についての理解と認識を、日本にもたらすということが1番目の意義である。

2番目の意義は、海外華人移民のアイデンティティについての理解を深めることである。寒川は、20世紀における海外華人移民の家庭に生まれ育っている。19世紀末期から20世紀初期にかけて、中国華南地域から、多く

の華人がシンガポールやインドネシアを含めた東南アジア全域に渡り、定住することになった。これら華人移民およびその子孫の多くは、それぞれの居住地で、現地の公民権を取得し、現在は、その土地で生活をしている。

日本では、彼ら海外華人移民の子孫を「華僑」としてひとまとめにしたり、彼らを、中国大陸の中国人と同一視したりする傾向があるが、実際は、東南アジアの華人と、中国大陸に居住する中国人とは異なるものである。現在、東南アジアに居住する多くの華人は、それぞれの居住地に対する「国家アイデンティティ」を持ちながら、華人としての「民族アイデンティティ」、原籍地に対する「郷愁」や「原籍地のアイデンティティ」、職業や事業などでつながる「業縁によるアイデンティティ」といった様々なアイデンティティを多重に有している。そして、様々な領域で、他の国家や地域に居住する華人と、独特なネットワークを築いている。

本稿を通して、寒川を例とした東南アジアの華人のアイデンティティやネットワーク、とりわけ寒川と関係が深い「華文文壇」に対するアイデンティティおよびネットワークに

ついでに理解を深めることに、大きな意義をもたらすと考えている。

3番目の意義は、この翻訳をすることに至った最大の理由であるともいえる。寒川のインドネシア華人社会に対する多大な貢献という意義である。シンガポール華人である寒川は、中国語の使用および中国語による活動が30年以上にわたって厳しく禁止されていたインドネシアの状況を他人事とは思わず、水面下でインドネシアの華文作家や詩人たちの活動を支えてきた。中国語が弾圧されるインドネシアで、華文書籍や詩集を水面下で提供したり、インドネシア華人による作品を活字化する機会をシンガポールにおいて作ったりするなどして、インドネシア華人の作家あるいは詩人としての活動を陰で支えてきた人物である。

特に、1998年に台北で開催された「第3回世界華文作家大会」において、寒川は、リスクを顧みず、同年5月にインドネシアで発生した排華暴動によって甚大な被害を受けたインドネシア華人たちのために、インドネシアの排華暴動を厳しく批判した。それをきっかけに、世界中の華文作家たちが動き、国連人権委員会に対して、「インドネシア政府にインドネシア華人の公民権、生命、財産を保障させること」を要求したのである。一步違えば、この寒川の行動は、インドネシア政府からの抗議の対象となっていた可能性もあり、この行動のリスクは非常に高いものであった。寒川のインドネシア華人の人権を守るために取った行動は、賞賛に値するといえ、当時、排華暴動の起こったインドネシアの至近にあるシンガポールにおいて、報道や、逃れてきたインドネシア華人の声などを通して、排華暴動の悲惨さを目の当たりにしていた訳者は、寒川の勇気ある行動に心打たれたのであった。

なぜ、中国語の使用および中国語による諸活動が30年以上にわたって厳しく禁止されていたインドネシアで、それらが解禁された直後、すぐに華文作家協会が立ち上げられたのか。断圧下であっても、中国語を途絶えさせることなく執筆活動を維持させていた作家や詩人が多かったのはなぜか。それらと寒川に

よる支援とは無関係であるとはいえない。寒川には、2004年にインドネシア華文学推進に対する貢献賞が、2010年12月にインドネシア華文学界から感謝状が、それぞれ贈られている。近年の東南アジアにおける国家事情ならびに国家を越えた人のつながりを理解することにも、本稿は大きな意義をもたらすといえる。

加えて言えば、本稿の翻訳を決めたことには上述の3点の意義のほかに、訳者の個人的な理由もある。訳者は1996年から2001年にかけて、シンガポールにおいて研究活動に従事しており、寒川とは研究活動を通して1996年に知り合い、その後の数年間、研究を通しての交流を続けた。寒川は、当時、本業である政府関連機関において仕事をする傍ら、作家および詩人としての活動のみならず、ボランティアでシンガポールの文教活動、同郷会などの活動などにも精力的に携わっており、シンガポール社会にも大きく貢献していた。このたび翻訳をした原稿でもそういった活動が取り上げられているが、寒川は、社会的地位を有し、多忙な生活を送っているにもかかわらず、国籍を越えた知人や友人、作家仲間に対して、公平に真摯に付き合いを続けていた。効率や合理性が要求され、人情や同情などが後回しになる傾向が高くなりがちな現代都市社会において、寒川とのかかわりを通して、人々が忘れてはいけないものは何かということを学ばせてもらったのである。

なお、寒川の略歴は以下の通りである：シンガポール国籍で、シンガポールの著名な華文詩人。1950年に金門島にて生まれる。その後、シンガポールに移り、シンガポールにて教育を受ける（崇福小学校、南洋華僑中学、南洋大学を卒業）。その後、政府関連機関である人民協会に就職し、仕事の傍ら、作家および詩人としての活動、シンガポールでの文教活動、インドネシア華文芸発展のための支援などを続け、シンガポール社会ならびにインドネシア社会に対して多大な貢献を行った。シンガポールのメディアにも幾度も紹介されているほか、2004年にはインドネシア華文学推進に対する貢献賞、2010年12月には

インドネシア華文文壇からの感謝状が贈られている。妻、2人の息子がいる。

訳者は、上述の意義を踏まえて、第一段階として、2013年度の静岡産業大学情報学部研究紀要に、「シンガポール華文詩人・呂紀葆（寒川）の生い立ちと経験」（『金門郷僑訪談録（八）【獅城、檳城篇】』、台湾出版、2010年12月に「呂紀葆先生訪談記録」として掲載一）の翻訳文を投稿した。本稿は、その続編とも言えるものであり、寒川のインドネシアの華文作家たちとの関係をより深く理解することができるものである。なお、このたび翻訳をすることになった文章は、ペンネームである「寒川」が使用されているため、原稿のまま「寒川」の呼称を使用することとしている。また、このたび翻訳をすることになった文章の執筆者は主に、東南アジアで活躍する華人の作家である。また、本稿では、できるだけ原文に忠実に翻訳することに努めたが、読みやすくするために、長い段落については適度に改行を行い、小見出しごとに番号を振った。中国語については「華語」または「華文」という名称を使用した。また、補足が必要な箇所には、「訳者注」と明記して補足を行った。（訳者）

2. インドネシアの婿ともよばれる寒川によるインドネシア文芸への支援

（以下『印華日報』、2015年6月16日より）

寒川、本名呂紀葆は、1950年に金門島にて出生、1972年にシンガポールの南洋大学中文系を卒業する。卒業後の30年間はシンガポール人民協会（民間文化活動を請け負うシンガポールの組織）にて勤務し、主に人民協会の出版業務を担当していた。退職後は、主にシンガポールの文化活動に関わりながら、空いた時間を使って、インドネシア文芸やアセアン文芸の場で編集作業を行い、インドネシアの文化芸術とは密接な関係を築いていた。

寒川夫人（訳者注：インドネシア出身の華人）のペンネームは維維といい、彼女はインドネシアの作家仲間でもあった。このような理由から、彼は、インドネシアの華文文壇とは深い縁を有している。インドネシア政府は、長年、華語の使用および華文教育を禁止して

きた。華文刊行物が危険ドラッグと同様に、禁制品とされていた厳しい時代に、寒川は危険を顧みず、インドネシア華文文壇の仲間たちに、華文書籍を密輸していた。1970年代初頭から、2001年にインドネシアが華文に対する禁制を解除するまでの30年間、彼が、策を練り苦心して千冊にもおよぶ華文書籍をインドネシアに運んだのは、インドネシア華文文壇の火が消えることがないように、火種を提供し続けるためであった。

インドネシア華文作家協会主席の袁寛は、自身の『私の知る寒川』の中で、以下のような文章を記している。「1998年8月、台北で開催された第3回世界華文作家大会において、主催機関は、私を招待するとともに、同年5月の排華暴動における被害者の中から、出席を希望する人を1名見つけてほしいと言ってきた。私は、被害者の中から1人の出席希望者を見つけたが、出発を1週間前にして、その人物は、夫人の反対によって出席を辞退せざるを得なくなり、また私も、家族の強い反対によって出席を見送らねばならなくなった。このような状況の下で、インドネシア出身の妻がいるという立場で、寒川はこの会議に出席することとなった。彼は、会議の場において、私たちの体験、および彼が見聞したことをもとに、インドネシアで発生した華人に対する残忍で非人道的な行状を証拠立てて話してくれた。そして、会の代表とともに、この会議の中で、英中2言語による『世界華文作家によるインドネシア排華暴行に対する厳正な抗議』の声明が出されることになったのである。その声明は、インドネシア政府ならびに駐在機関に抗議書として届けられた。国連人権委員会にもインドネシア排華暴動を訴え、国連事務局長のアナン氏に対しては、人道主義と人権尊重の原則の下、インドネシア政府に確実にインドネシア華人の公民権と生命財産の安全のための措置を取らせるように求めた。このような行為に出ることは、ある程度の危険性を伴うことが予想された、寒川の正義感は、こういった危険性よりも、被害を受けたインドネシア華人のためにやるべきことを優先させたのである。」

このように、寒川は、インドネシア華人が最も辛い時に、自身の危険を顧みず、身を挺して動いたのである。「錦に花を添えるのは容易であるが、雪の中に炭を送るのは難しい」という諺があるが、我々は、この史実を忘れることはないだろう。以下に、作家の朝歌（訳者注：シンガポールに移民した中国人作家）が執筆した寒川に関する文章を転載する。

3、文学のための苦心と努力——寒川の印象を記して

(1) はじめに

寒川先生と知り合ってから、今でもまだ夢の中にいるような気持ちになることがある。長い間、フェイスブックをしていなかった私は、ある日、ふとのぞいてみようと思いついた。友人申請の欄の中に、「寒川」の2文字がすぐに目に入った。私は、見間違えたと思ったが、急いで開けてみると、なんとということか。本来なら、まさしく、求めることすら困難だと思っていたものが、いとも簡単に手に入ったのであった。かねてより名を聞いていた大詩人の寒川先生は、このようにして、私のフェイスブックを通しての良き友となったのである。

その後の一切は、物語のような流れであった。私は、僭越ながらも、自分の詩歌を数首、寒川先生に送った。まるで弟子入りしたかのような態度で、恥ずかしげもなく拙作を呈上し、教を乞うたのであった。思いもよらず、寒川先生は、きちんと私の詩歌に目を通してくれ、私たちは、顔を合わさないまま、緊密な交流をすることになったのである。

「書作を始めたばかりの時は、急ぐ必要はない。著名作家の作品に多く触れ、作品の含意と技巧を深く理解してから、自分の創作水準を高めて豊かなものにしていくべきだ。イメージが湧けば、文字にする。急いで発表する必要はなく、じっくりと吟味し、推敲することだ。」このような懇切丁寧な指導を、「フェイスブック」で知り合ったばかりの、一度も会ったことのない大先生がしてくれるということに感極まっていた。

寒川先生と初めて対面したのは、ブキティ

マ（訳者注：シンガポールの地名）にあるセブンマイルというコーヒーショップであった。慌ただしかったが、忘れられない思い出となった。もともと、弟子入りのためのお礼としての食事会を設けさせてほしいと思っていたが、彼が多忙のあまり、何度か延期になっていた。また、「指導者としての資格がないので、弟子を取るといったことをしていない。機会を見つけてお話ししましょう。」と、とても丁寧に言われた。

その日、寒川先生は、突然電話をしてきた。何人かの作家仲間がいつものように、そこで集まりを持つことになっているので、もし時間があれば、みんなで会おうと言ってくれたのである。私にとっては望外の喜びであった。このような感じで初対面が実現した。初めて会った寒川先生からは、文豪の風格が伝わってきた。

その日、知り合って10年あまりになる莫河（訳者注：シンガポールの作家）も同席していた。寒川先生は、その他の何人かを私に紹介してくれた。黄九穩、梁鉞、劉文注、李成利博士、舒然（訳者注：これらはすべてシンガポールの作家や詩人）である。1時間余りの短い時間、私たちは、文芸について語り合った。その中心の話題は、アセアン文壇をどう発展させていくかということについてであった。

(2) 無償で特別ページを編集、インドネシア華文文学を支える

寒川先生は、平素から、アセアン各地の文学を積極的に支援しており、最近では、ミャンマーで開催された「第9回東南アジア華文詩人大会」に出席していた。ミャンマーの主催者側が、寒川先生がこれまでアセアン文芸を推進してきたことに対する貢献を重視し、特に『インドネシア国際日報』の「アセアン文芸」という特別欄の責任者を務めていたことから、彼をゲストとして迎え、スピーチを依頼したのである。私は、後にそれをインドネシアの新聞報道において知ったのだった。

最近、インドネシアの新聞社の李卓輝編集長がシンガポールに来た際に、私は彼と会う

機会があり、お茶の時間を共にした。その時に、寒川先生が、5年前、当時『インドネシア国際日報』で編集長をしていた李卓輝氏の依頼を受けて、新聞の文芸欄の責任者、ならびにシンガポールの原稿担当者に任じられることになったと知った。

1970年代、寒川先生は、『シンガポール月刊』の文芸版の責任者、および『挺進報』（記者注：シンガポールの刊行物）の中にある「アセアン文芸」欄の編集責任者となっていた。それを知った李卓輝編集長が、彼に仕事を依頼したのである。寒川先生は、重責をすべて引き受けると申し出た。そして、彼が先頭に立って、アセアン各地の作家仲間、例えば、蘇清強（マレーシア）、楊玲（タイ）、王勇（フィリピン）、一凡（ブルネイ）、林小東／曾廣健（ベトナム）、許均銓／黃徳明（ミャンマー）たちに呼びかけた。彼らは全員、申し出を辞退することなく、原稿を揃えることに協力した。それらはすべて無償の行為であり、原稿料はインドネシア華文作家協会の活動基金として献金されることとなったのである。

2014年、李卓輝編集長は、インドネシアに新たに創刊されることとなった『印華日報』の編集長に任命されることになり、寒川先生は、その特別企画ページある「アセアン・コーナー」の編集責任者となった。すでに、毎週『インドネシア国際日報』の「アセアン文芸」一面を担当しなければならない状況であったが、それでも彼は、この新たな仕事を引き受けた。その後、寒川先生は、毎週、インドネシアの2大華字紙の文芸特別ページの担当者として、アセアン文芸の発展ために精力的に働き、インドネシア華文学の精神を支え続けた。そのことを心から感服している。

寒川先生は、「アセアンに文学の萌芽がありさえすれば、火が広野を焼き尽くすように広がっていくだろう。一部の地域の華文学はまさに発展の途中にあるが、私たちはそれを喜ぶだけではなく、積極的に支援していく必要がある。」と述べている。

私は、最近、新しい本を出版するために、夜遅くまで起きており、寝る前には、フェイスブックを一通り見るようになっていた。寒

川先生は常にオンラインになっていた。フェイスブックの交流を通して、彼が多くの時間をインドネシア華字紙の文芸ページの編集に費やしていることを知った。あの日、会った時に、報酬がない仕事にどうしてこんなに精力的にやるのかという質問を彼に投げかけてみたところ、寒川先生は、笑いながら「報酬がないからこそ、辞退することをしない。」と答えたのだった。

（3）華文書籍をインドネシアに「密輸」

インドネシアで華文が禁止されていた排華時代、寒川先生は恐れもせず、シンガポールとインドネシアの地を行き来し、華文を持ち込み、インドネシア華文学の発展を支援してきた。寒川夫人はインドネシア華僑であり、寒川先生の父の兄、父母の従兄弟はみなジャカルタに住んでいた。寒川先生は、毎回インドネシアを訪れる度に、多くの華文書籍を「密輸」して持ち込んだ。当時のインドネシアは、華文を厳しく禁じていたため、多くの人は持ち込む勇気さえ持てないでいたが、寒川先生は、人が恐れることをやっていた。著名なインドネシア華文作家である故黄東平は、1980年代に、寒川のことを「インドネシア華文文芸の功労者」とであると称えた。

『シンガポール早報週刊』が、2005年2月に、寒川先生にインタビューを行って、彼があこの時代に、華文書籍を「密輸」していた状況についての詳細を報道した。後に、寒川先生にそのことについて聞いたところ、彼は、ただ淡々と「インドネシアに本を持ち込む際に、見つかったこともあったが、ちょっとお金を払えば何とかになった。そして、再犯を続けていくことになった。ある時は別送もした。1箱につき百～2百冊ほど入れて送った。シンガポールのビジネスマンに託したこともあった。私が20年あまりの間、インドネシアに持ち込んだ書籍は膨大で、2千冊ほどにはなっているはずだ。」と語った。寒川先生は、そんなことは容易いことだと言っていた。2年前、寒川先生は、各地の作家が署名入りで彼に送った数百冊を含む3千冊余りの愛読の文芸書籍を、インドネシアの大学に寄贈した。

彼は、1人で楽しむよりも、みんなで楽しんで方がいとと話した。本は本棚に並べて個人の装飾品となってしまうより、公共の場所、特にこういった種類の書籍が欠乏しているインドネシアの大学に置いた方が、より多くの人が恩恵を被ることができるとの考えであった。

1970年以降、寒川先生が創作する詩歌には、「インドネシアの要素」が多く含まれるようになっていっている。暁星（訳者注：インドネシアの詩人）がインドネシア語に翻訳した『トバ湖の恋歌』（2008年）は、インドネシア語と中国語の2言語による寒川先生の詩集であり、インドネシアの人物や風景を題材として創作したものが53首含まれている。彼がその前に出版した『雲樹山水の間』は、海外華文作家が初めて出版したインドネシア旅行記である。8月17日に、彼の3冊の創作集の発表会が開かれたが、こういったすべてのことは、夫人の出生地であるインドネシアを愛していることと大きく関係していると言えるだろう。「インドネシアには何度くらい来たことがあるのか？」という私の質問に対して、彼は、「覚えていないほど多い。故郷の金門には15～16回ほど帰郷したが、インドネシアに至っては、少なくとも50回くらいになるだろう。」と笑って話していた。彼は、この美しい島国について、数多くの詩を詠んできたのだ。以下に、「ボロブドゥールの仏塔」という寒川先生の詩を紹介したい：

立於丘陵之上
兀兀然，你底影子是蒼鷹
覆蓋廣漠的土地
你與蒼天同在
日月是照明你的雙燈
坐熟了幾個世紀
又望斷了幾個春天
絕塵而立，你擎天的塔首
可與白雲看齊
與青山爭高
若是過穴的風聲
塔，便講述一首史詩
便說佛的歷史

縱使在火山季
驚蟄如歌，岩漿似酒
七十一座佛像以外
惟一座清楚可見：對天地
嚴肅且雙手合十
而那邊矮牆口
綠苔已爬上浮雕了
自七級浮屠走下
總覺得有誰在高處
冷冷地望著我
在不知是敬是愧是驚下
我底心，飄然如瑣碎的雨（1975年）

（訳者による補足：「あなた」をボロブドゥールの仏塔に見立てて、ボロブドゥール遺跡から感じられる思いを詠んだ詩。）

もう一首は、彼がジャカルタの風景を詠んだ「皿型のアンテナ」であり、簡潔で精悍で、奥深い哲理があり、私も好きな詩である：

張開口
碟型天線
把世界各地的影像
網羅後
又吐出來

椰加達の上空
碟網交錯
每一台都朝天
都貪婪地
要把整個天空
吞噬下來（1991年）

（訳者による補足：ジャカルタに多くみられるアンテナの風景を題材にして、ジャカルタらしい風景を描写した詩。）

30年余り前、寒川先生は、インドネシアの作家仲間に、シンガポールで作品を発表する機会を提供したり、国外の文学セミナーや大会に参加するための推薦をしたりするようになった。その後、インドネシアの作家仲間が、インドネシアを出て、東南アジアや世界で活

躍するための協力を積極的に行っていた。インターネット上の資料によると、彼が最も早い時期に知り合った、インドネシア華文作家である黄東平、ロミオ・鄭、シシリアを、アジアレベルあるいは国際レベルの文学会議に出席できるように推薦していたこともある。

1998年8月、「第3回世界華文作家大会」が台北で開催された際に、寒川先生は、自分に起こり得るかもしれない身の危険を顧みず、舞台上、インドネシアの排華暴動を糾弾する文章「血が滴る5月」を読み上げた。この正義感、世界中の華文作家の心を動かした。3年前、彼は、困窮するインドネシア作家の黄東平のために、6千シンガポールドルを募り、また、わざわざ飛行機でソロまで会いに行った。「文人は助け合う」という崇高な行いを自ら体現したのである。

2004年、寒川先生のこれまでのインドネシア華文文芸に行ってきた支援と貢献に対して、インドネシア華文作家協会は、貢献賞という形で彼に授与した。当時のスピーチを聞き、インドネシア華文作家協会の海外顧問を務める寒川先生は、インドネシア華文作家協会の招きがあれば、創作コンテストの審査員であろうと、文芸活動をテーマにした講座や座談会であろうと、それらを最優先として、どんなに多忙でも、インドネシアに飛んで参加していたということがよくわかった。寒川先生との世間話の中で、東南アジアの華文文学の発展が直面する困難と挑戦、そして勇気と熱意を持った開拓者が必要であることを、彼は私に教えてくれた。寒川先生は、まさにこのような開拓者、そして建設者であり、歴史に残るべき人物である。

（4）ルーツを明らかにし、故郷への感情を強く抱く」

私は、以前読んだ一篇の文章「離散と回帰 - - 寒川の詩にみられる父祖の地への感情と文化郷愁」を思い出した。その作者は、シンガポールの著名な作家の伍木である。私は、その文章を通して、寒川先生の故郷に対する感情に深く心を打たれたのである。寒川先生と知り合ってから、私は、寒川先生個人およ

び彼の文学作品に、顕著で特別な点がみられることに気づいていた。寒川先生の望郷の詩句を読むと、離愁をあらわす言葉が、水がわずかに流れだすように、私の心を徐々に湿らせていくのであった。

台湾詩人の張国治教授と報道文学者の楊樹清は、それぞれ、寒川先生の著作である『金門シリーズ』（2002年）および『文学は故郷に戻る』に序文を書いている。彼らは偶然にも同様に、寒川先生が海外詩人の中で、故郷に対する思いが非常に強い一人であると指摘している。寒川先生の詩集を開いてみると、このような詩歌が20首余り見られる。例えば、「子供時代・金門」、「故郷に帰る」、「古い場所」、「故郷の醸造酒」、「歴史のための過ち、悲歌」、「へその緒が切れた孤島」などである。これらは全て、故郷の本質まで遡っているものであり、また中華文化に対するアイデンティティが生んだ郷愁でもある。

寒川先生の故郷に対する思いは、彼の政治および歴史に対する一種の奥深い思考も体現している。「へその緒が切れた孤島」は、へその緒が切れた嬰兒という表現をもって、金門島と中国大陸の時局を象徴している。金門島が、政治に挟まれてどうにもならない状態にあつて、理由なく犠牲になっているという悲しみを、紙の上に表現している：

夾在歴史的縫中
壓迫感已然是半個世紀的事了
冷戰是相持不下的溫度計
偶爾升高
就像颱風一樣迅速席捲
在台海兩岸
一場炎黃子孫王位的鬥爭
仍在延伸
所幸
無人傷亡

在戰爭的年代
這兒，是前線
不能避免
炮彈如雨般的蹂躪
單打雙不打，堅硬的花崗岩

不過是最後倒下
血肉橫飛，光榮的
犧牲品

母親在遠方，隔著海
再不能緊緊依靠著
孤島，如同斷了臍帶的嬰孩
從此失去營養。從此
貧困和孤單
一樣難挨
夜裡，料羅的風
又一次寂寥地
掠過

(訳者による補足：「へその緒が切れた嬰兒」
を金門島に見立てて、冷戦下の金門島がおか
れた状況を詠んだ詩。)

私は「故郷の醸造酒」という詩が好きだ：

在炮彈累累的土地上
一株株高粱的成長
是如雨般炮彈的
灌溉。炮灰的
施肥

戰戰兢兢二十年
故鄉的老酒
再也分不出
是高粱，還是
炮火味

而我，始終沒有勇氣
喝一口祖父最愛的
老酒，沒有勇氣
忘掉
戰爭

(訳者による補足：中台兩岸の戦いによっ
て、故郷で醸造された酒の味が、コーリヤン
の味なのか、火薬の味なのか分からなくな
り、祖父が愛した酒を口にすることができな
いという描写を通して、反戦のメッセージを
伝える詩。)

詩句は平易であるが、読後、詩人による反
戦の強いメッセージを感じ取ることができ
る。この文章を書いている時は寒川先生の誕
生日でもあった。また、中露が、反ファシス
ト勝利の70周年記念を祝っている時でもあ
ったが、天下の太平と、永遠に戦争のない世界
を願うばかりだ。

(5) 新人を助け、作家仲間からの尊敬を集 める

作家仲間たちの話を通して、寒川先生は、
新人を助け、新人の世話をすることに力を惜
しまない人物であるということを知った。彼
の人柄は、温和で、おごり高ぶらず、損得勘
定を持たず、作家仲間からの申し出があれば
できる限りその要求に応じようとしていた。

莫河(訳者注：シンガポールの作家)は、
寒川先生のことを、莫河自らに対してだけで
はなく、全ての新人に対して、同様に一生懸
命に力を注ぐ人物であると述べている。「ミヤ
ンマーからシンガポールに来た段春青も、寒
川先生からは大変世話になっていた。彼女は、
寒川先生に、アジア華文作家協会がフィリ
ピンで開催した青年文芸作家セミナーへの参加
を推薦してもらった。中国からシンガポール
に来た玲子と鄒璐とともに、いろいろな方面
で寒川からの支援を得ている。」とも話して
いた。

更に多いのが、新人または友人の処女作の
序文の依頼である。1980年代から今まで、こ
ういった方面では、早くは、李成利／悠宇(訳
者注：シンガポール)、北雁／葉竹(インド
ネシア)、暁星(インドネシア)、シシリア(イ
ンドネシア)、方桂香(訳者注：シンガポー
ル)、立万(インドネシア)、岩石(インドネ
シア)、王彩玉(訳者注：シンガポール)、王
志光(同：シンガポール)、謝夢涵(インド
ネシア)、鄒璐(訳者注：中国からシンガポー
ルに移住)、陳秀竹(台湾)、段春青(ミヤ
ンマー)、許永順(訳者注：シンガポール)、林
碧峰(同：シンガポール)などがそうであつた。
また、老作家、例えば、孫国静(インドネ
シア)、李金昌(インドネシア)、李卓輝(イ
ンドネシア)、林子夜(訳者注：シンガポール)、

莫河（同：シンガポール）などが新たに出版した本にも序文を書いている。これらからも分かるように、寒川先生は、作家や友人から尊敬と親しみを抱かれているのである。こういったことは、彼と同世代の作家には、あまり見られないことである。

実際に、寒川先生が支援してきた人物は数多い。20～30年前から、インドネシアの作家仲間が資金を集めてシンガポールで出版するのに力を貸し、序文を書いていたが、すべての依頼に快諾だったという。インドネシア作家協会総会長の袁覓は、インドネシア華文作家仲間がシンガポールを訪れると、寒川先生は、どんなに多忙でも時間を作って空港まで友人を迎えに行くと話していた。この話からも、寒川先生の評判をうかがい知ることができる。訪問客を大切に、人助けが好きなことから、台北に事務所をおくアジア華文作家協会および世界華文作家協会のメンバーである作家たちが、シンガポールを訪れた際には、必ず彼に連絡を取っているほどである。彼は、可能な限り時間を作って対応し、こういった作家たちとの相互交流に力を入れているのである。

百度（訳者注：中国で最大の検索エンジン）や新浪（同：中国で運営されているポータルサイトやミニブログサイト）などのメディアで、寒川先生の文芸についての情報を検索すると、数多くの作家仲間が、寒川先生の人柄や文壇に対する貢献について称賛しているのを見つけることができる。例えば、先述の黄東平（インドネシア）、袁覓（インドネシア）のほかにも、蕭村（中国）、曉星（インドネシア）、一凡（ブルネイ）顧長福（インドネシア）、莫河（訳者注：シンガポール）などもそうである。寒川先生の人に対する誠実な態度、口先だけではない実行力は、海外における華文文壇の中では良く知られているのである。

あの日の集まりで、初めて知り合った女流詩人の舒然（同：シンガポール在住の中国人）もまた、寒川先生と知り合ってから、彼に励まされ、推薦を受けて、詩作をインドネシアの2大華字紙に発表できたという話をし

てくれた。私は、寒川先生と知り合ってから間もない頃、寒川先生はいくつかの詩歌についてアドバイスをしてくれ、その後、インドネシアの華字紙『印華日報』の「アセアン・コーナー」にて発表するために推薦してくれたことが、大きな励みとなっていることを彼女に伝えた。その時の作品は、私がシンガポールで初めて発表した詩作でもあり、また、アセアンの作家仲間の刊行物にも、同じものが掲載されることになったのだが、うれしさの上なかつたことは言うまでもない。

私は、10年あまり前に、中国の山東省からシンガポールに移住し、人物の伝記を書いたり、著名人にインタビューをしたりする仕事に従事しながら、余暇の時間を使って、趣味で詩歌を作っていた。寒川先生が、私の作品を推薦してくれ、9月に台南で開催される「第1回フォルモサ国際詩歌フェスティバル」への参加を後押ししてくれた。それによって視野が広がり、創作の力が湧いたことを、心から感謝している。

寒川先生は、華僑中学（訳者注：シンガポールの南洋華僑中学）在学中に、中文学会の主席を務め、壁新聞の編集責任者を担っていた。大学（訳者注：シンガポールの南洋大学）時代は、中国語学報および仏教学会の『貝葉』の編集責任者でもあった。社会に出てからの彼は、シンガポールの3つの重要な文学組織であるシンガポール文芸協会、シンガポール作家協会、錫山文芸中心にて、理事を兼任していた数少ない人物であった。その関係から、2005年、これら3団体によって、『シンガポール華文作家の略伝』が合同で出版される運びとなったのである。彼は、衆望を担って、その実行委員会の秘書に委任され、出版経費や編集作業全般を調整する任務に当たった。その書籍は、2006年5月に出版された。当時、シンガポールの教育部政務部長であった曾士生が、その発表会場において、参加者の前で、この本に対する寒川先生の仕事ぶりとの貢献を称賛した。曾政務部長による称賛は、まさにふさわしいものであった。

シンガポールの作家たちを観察していて分かったことがある。寒川先生は、長年積極的

に、文学、地域、地縁血縁団体に参与し、金銭や力を惜しまず真面目に取り組んでいる、ごく少数の人であることである。寒川先生は、これまで歩んでいた道に対して、後悔などはしていないという。「文学が好きで心身共に捧げている、ただそれだけのことだ」と。この簡潔な理念が、彼を奮い立たせているということを知っている。既に、こうやって彼は40年も歩いてきた。そして、まだこの歩みは続いている……。

4. 寒川とインドネシアの作家仲間との苦難を共に (以下『印華日報』、2015年6月17日より)

寒川、この輝く名を持つ彼は、文学の世界で異彩を放っていただけではなく、高潔な人格を持ち合わせた人物である。彼の高潔な人格は、我々仲間の間では誰もが認識していることであり、それは人々の敬服と称賛を集めていた。以下は、李卓輝 (訳者注：インドネシアの編集者) による「友誼・気心・辛苦から見える道筋 - 寒川と作家仲間が乗り越えてきた苦難」と、暁星 (訳者注：インドネシアの詩人) による「長く記憶に留めおくべきインドネシア華文史書の功労者 - 寒川 - インドネシア華文作家協会成立十周年に思いを馳せて」の2文である。それらは、文壇の重鎮である寒川の見返りを求めない献身、権力を恐れず戦う精神について紹介したものである。

5. 友誼・気心・辛苦から見える道筋 - 寒川と作家仲間が乗り越えてきた苦難 (インドネシア・李卓輝)

(1) はじめに

諸葛孔明は、以下のような言葉を残している。「立派な人間の友情は、温かいからといって花を増やすこともなければ、寒いからといって葉を落とすこともない。どんな時でも衰えず、順境と逆境を経験して、友情はいよいよ堅固なものになっていく。」また、アメリカのエマーソンは「黄金は精錬炉から生まれ、友情は逆境の中において見つかる」という言葉を残している。これらはともに、友とは困難に直面した際に助け合うものであ

り、これこそが真の友情であるということを示している。

私とシンガポールの作家である寒川は、一回りの年齢差があり、また2つの国に分かれて住んでいるが、心が通い合っており、固い友情で結ばれている。まさに、「海内知己を存すれば、天涯も比隣の若し (心の知れた友がいれば世界のどこにいても近しく感じる)」(訳者注：唐初期の詩人王勃が友人を見送った際の詩) である。以下の3つのストーリーをおして、寒川の友人に対する人となりを紹介したい。

(2) ひととはだ脱いで力になる：若い医師の対応を指摘

1つ目のストーリーは、2010年3月11日に私の妻が突然脳卒中になった際のことである。友人の協力の下で、我々は、同日の深夜に救急専門の航空機でシンガポールに飛び、シンガポール国立大学病院の救急外来に到着した。妻は、その病院で30年近くにわたって検診を受けており、それぞれの専門医による記録が残っているため、適切な処置が得られることを期待していた。しかしながら、救命救急の若い医師は受け入れを拒否し、ジェネラルホスピタルの救急外来に移動することを余儀なくされたのである。治療が15時間近くも遅れてしまったものの、妻は一命をとりとめ、病状は回復した。

寒川はそれを知るや、不公平感に共感してくれ、『聯合早報』(訳者注：シンガポールの主要な華字紙) の「読者の声」に、国立大学病院の若い医師の対応の不適切さと、長期利用している外国人患者に対する病院のサービスの不十分さについて書いた一文を寄稿した。この件はメディアの関心を集め、『聯合晩報』(同：シンガポールの主要な華字紙) が、わざわざ私に電話インタビューを行うこととなった。また、インドネシアの作家仲間たちもそれぞれ書くことによって応援してくれた。その結果、シンガポール国立大学病院の院長が、直接謝罪の文書を送ってきて、ジェネラルホスピタルまで人を派遣して、妻を見舞ってくれることになったのである。

国立大学病院の院長の文書を公表することに意義があると考えて、以下に公表する。それは寒川がひとはだ脱いで動いてくれたことによる結果であり、また、シンガポールの若い医師に対する警鐘にもなると考えたからである。文書は以下のとおりである：

2010年4月16日

親愛なるミスター・リー：

貴殿とご家族が、奥様が3月12日に当院に緊急搬送された際に、ご不便をおかけしご不快な思いをさせてしまったことを、このたび、私は国立大学病院を代表して、深くお詫び申し上げます。

私は医療チームと長年仕事を共にしていますが、患者様に対する医療チームの臨床判断に相違があること、彼らが大量の仕事量に直面していること、また、彼らが患者様の利益を第一と考えているはずであることを知っています。患者様の安全を最優先に考えています。

今回、私は、医療チームが貴殿とご家族とのコミュニケーションの過程で、誤解を引き起こし、不安にさせてしまったことに対して、心から申し訳なく思っております。

奥様の病状が改善されているということは幸いです。私も医療チームも心から、奥様のご快復をお祈りしております。

もし、貴殿とご家族が何か必要なことがございましたら、こちらの患者専門部門の副主任のXXX（電話番号〇〇〇）までお電話を下さい。できる限りお力になりたいと考えております。

貴殿とご家族のご健康をお祈りして。

シンガポール国立大学病院院長

あれから5年が経過しているが、この文書を何度読んでもあたたかい気持ちにさせられる。そして、あの時の寒川の力添えにも感謝するのである。

(3) 無私の精神で「アセアン文芸」および「アセアン・コーナー」の編集を担当

2つめのストーリーは、寒川が無私の精神

で「アセアン文芸」および「アセアン・コーナー」の編集を担当してくれたことである。2010年、私は、『インドネシア国際日報』総編集長の立場で、寒川に「アセアン文芸」の編集責任者になってもらうことを依頼した。ここでは、週刊で、一国ごとに、アセアン諸国の作家仲間の短編を掲載した。当初は、シンガポール、マレーシア、タイ、フィリピン、ブルネイ、ベトナムで、後に、ミャンマーが加わった。創刊号では、私が簡潔な紹介文を書き、それは歴史の1ページとなった。毎号の原稿依頼は容易ではなく、原稿料についても同様であった。寒川氏は、毎号の原稿料の全てをインドネシア華文作家協会に寄付することによって、前途多難であるインドネシア華文学の発展を支援していくという提案をした。あっという間に、それから5年以上が経過し、「アセアン文芸」も既に352期を刊行した。寒川の苦労と功績は、荣誉ある褒章を得てしかるべきであるだろう。

2014年10月、私は、新しく刊行されることになった『印華日報』の編集長として招かれ、インドネシアが大きな改革の新時代に向かう中、アセアンと「3大共同体」を実現することに力を注ぐことになった。（訳者注：「3大共同体」とは、2003年の会合でASEAN各国首脳が採択した「第二ASEAN協和宣言」。2020年までに「政治・安全保障共同体」、「経済共同体」、「社会・文化共同体」からなる「ASEAN共同体」を設立することで合意。）その後、ほどなくして、ともにアセアンの仲間であるということから、寒川を「アセアン・コーナー」の編集責任者として招くことを思いつき、彼もまた迷わず即答で引き受けてくれた。話し合いの結果、我々は、過去の方法を変更して、毎号、アセアン各国から作家仲間の作品を採用することとした。この方法によって、原稿不足を解消することができた。原稿不足になっても、インドネシアの文芸原稿を取り入れることで編集可能となり、全員が納得した。

「アセアン文芸」から「アセアン・コーナー」まで、寒川は新たな活躍をしたが、それは彼の大きな力によるものだった。アセアン文学の発展に精力的に動き、無私で黙々と働いて

くれたことは、我々が疑いなく称賛できることである。そして、我々が再び手を取り合っ
て、アセアン本部の支持の下で、質量ともに
更に高水準の『アセアン文芸刊』（3月刊行）
を出版する運びとなり、アセアン精神とアセ
アン全体の理念を更に崇高なものにさせるこ
ととなった。

（4）互いに助け合い、困難を共にする

3つ目のストーリーは、困難を共にしながら、作家仲間の写真を収集してくれたことである。寒川は、インドネシア華人の妻がおり、シンガポールの金門出身者の中では秀才とされていた。彼は、インドネシア各地からの作家仲間を親身になってもてなし、出身地にこだわることもなく、政治的な話をするこ
ともなく、友好的な態度をとり続けた。彼は撮影を愛好しており、常に小型のカメラを手にして、様々な場面で大量に写真を撮影していた。そして、帰宅後すぐにフェイスブックにアップロードし、世界中の仲間に近況を伝えた。このようにして、彼は、作家仲間たちの写真を完全に保存してくれることになったのである。作家仲間の写真が見当たらない場合は、寒川に聞けばすぐに見つけられた。最近、著名作家の黄東平が亡くなり、ネット上から彼の写真を探すことに限度があり、寒川に依頼したところ、2時間もたたないうちに、一気に20枚もの昔の写真を送ってきてくれた。このような迅速な行動も、人から絶賛されていた。

黄東平という老作家についていえば、彼は傑出したインドネシア華文作家であり、また、金門出身者の中でも不朽の作家であった。しかしながら、他人との縁は薄かった。若い世代のインドネシア華文作家にとっては、黄東平は傲慢であり、後進を見下すという印象を持たれていた。黄東平は、元気な時に、若い後進を支援したり指導したりすることが全くなかったため、年老いて病気になるからは、ごくわずかの作家仲間しか見舞いに訪れなかった。寒川は義理堅く、少なくとも毎年シンガポールで寄付を募っては、インドネシアのソロまで出向いて、黄東平を見舞い、寄

付を渡していた。また、ソロの華人社会の指導者たちにも、できる限り黄の援助をして世話してほしいという希望を伝えていた。これこそがまさに、苦労を共にする人の情だろう。寒川は、この老作家の欠点をよく知っているものの、目上の者に対する仁義を尽くした。寒川は、この名作家が他界する前に、孔子学院（訳者注：中国が海外の教育機関と提携し、中国語や中国文化の教育及び宣伝、中国との友好関係醸成を目的に設立した公的機関）からのアセアン文学賞の賞金を譲ったのだが、我々はそれを知って感動したものであった。我々は、こういった懐の広さを学び、インドネシア、シンガポール、アセアン文芸の発展を積極的に推し進めていかねばならないと実感している。

（5）おわりに

本来なら、これらに加えて、4番目、5番目、6番目というように、まだまだ書きたいことがある。しかし、各人にとっての貴重で多忙な時間、日々の新聞の紙面作りは時間との競争であるため、ここでとどめておく。寒川自身もまた、出版社を走り回って、華文文芸のための仕事を精力的に行い、まるで草を食べて乳を搾りだしているようでもある。3年後または5年後、苦難を共にしている人の情について、あらためて筆を執り、もっと輝いた文を書きたいと思う。

6、長く記憶に留めおくべきインドネシア華文史書の功労者—寒川—インドネシア華文作家協会成立十周年に思いを馳せて（曉星・インドネシア）

（1）インドネシア華文作家への支援

寒川と知り合ったのは、1970年代の中頃であった。当時は、インドネシアは、華語に対する厳しい弾圧を行っていた。寒川は、ちょうどそのもっとも厳しい弾圧が加えられていた頃に、華文の書物をインドネシアに「密輸」して持ち込むという危険な役割を果たしていた。その数は累積して千冊にもおよび、当時、ほぼ窒息状態であったインドネシア華文作家たちに「命を繋ぐため」の「酸素」を供給し

ていたのである。

インドネシアの著名な作家である黄東平は『インドネシア華文文芸の功労者 — 寒川』の中で、寒川は危険と隣り合わせで、策を練って「密輸」の人生を送ったことが記されており、読後、冷や汗がでたものであった。黄東平は、そこに、感動的な一文を書いている。「寒川は、何度か私に本を持ってきてくれたことがある。いつも、私への本はスーツケースの一番下に入れてあり、自分自身の本は外側に乗せてあった。もし発見された場合、金を払うことで、イミグレーションの職員は形だけ一部の本を没収するのである。私への本は底に隠してあるために、イミグレーションをくぐりぬけてきた。」寒川のように自分のことを二の次にする精神は、いつも人々を感服させていた。

1970年代、寒川は、トムソン文化社の『挺進報』（訳者注：シンガポールの刊行物）の編集協力をしており、そこに、アセアンの文学交流を目指した「アセアン文芸」という特別欄を設けた。後に、『シンガポール文芸』および『ブキティマ文芸』（訳者注：ともにシンガポールの刊行物）の編集にも携わり、この活動を推し進めることに精を出した。そして、原稿を集めるために多くの時間を費やしていた。

1970年代初頭、彼はインドネシアを訪れ、インドネシアの華文文学をインドネシア以外の場にて紹介するという決心をし、その後、彼が編集責任者を務める人民協会の『民衆報』（訳者注：シンガポールの公的機関の刊行物）において、黄東平、ロミオ・鄭といったインドネシア華人の作品を掲載した。その後、何度もインドネシアを訪れ、多くのインドネシアの作家仲間、例えば、シシリア、馮世才、林万里、袁霓、明芳、北雁、曉彤、謝夢涵、そして私の作品などを、私たちの代わりにシンガポールの新聞や雑誌に掲載してくれた。彼は、これらの切り抜きを集めて、方策を練ってはインドネシアに持ち込んだり送ったりしてくれたほか、原稿料も預かって渡してくれた。こういった煩雑なことを続けることは大変なことである。決して自分の名声を

高めただけのためにできるようなことではなく、労力も時間もかかることである。しかし、彼は全く愚痴などを漏らさず、当時から人が気付かないような役割、むしろ、人に知られてはいけない役割を少しずつ数十年かけて黙々と担っていた。

1980年代の初旬、莊延波と林木海（訳者注：ともにマレーシアの華文作家）は、アジアおよび世界レベルの華文文学会議にインドネシアの代表がいなことを心配して、シンガポールの寒川を訪ねて、インドネシア華文文壇についての概況を聞いた。そして、当時、黄東平、ロミオ・鄭、シシリアが経歴が長く、創作活動においても積極的なインドネシア華文作家だということを知った。寒川の推薦によって、上述の3名は、アジアの文学会議に参加するようになり、世界華文文壇に足を踏み入れるインドネシア人の先駆けとなった。

1970年代末期に、ロミオ・鄭は、20名あまりのインドネシア華人による新旧の詩を集めた『新荷』を編集した。その後、ロミオ・鄭は、個人の詩集である『躍起』、黄東平との共著である『短稿一集』、『短稿二集』および『短稿三集』、ならびに16名のインドネシア華人作家の合作による『沙漠上の緑洲』などを編集した。これらは全て、寒川の多大な協力の下で、苦労を重ねて何とか出版にこぎつけることができたのであった。黄東平は、これらの書籍の後記の中で、「華文が弾圧を受けているこの地域において、華文文芸の生存を考えてくれている」と、寒川の熱意と思いやりに対して、感謝の気持ちを表している。

（2）1998年5月の事件に際して

世界中を震撼させた1998年5月13日から15日にかけて起こった事件（訳者注：インドネシアのジャカルタを中心に起こった暴動で、華人が攻撃の対象になった）では、私は偽名を使用し、寒川を通して、シンガポールの新聞紙上に、メダン（訳者注：スマトラ島北部の都市）から始まった暴動についての情報を載せることで、国外に対して警鐘を鳴らした。その後、暴動が広がっていき、一部のインドネシアの文学仲間が家族と共に、シンガポー

ルに逃れた。そして、しばらくの間、寒川の家に身を寄せることになった。寒川は、自分の寝室を、心身ともに疲れ切った作家仲間提供し、別の子供部屋をジャカルタから逃げてきた親族に使わせ、寒川一家4人は狭い書齋で寝起きするという生活になった。これだけでも、彼がいかに作家仲間を大切にしていることが分かる。

1988年8月に台北で開催された、「第3回世界華文作家大会」では、インドネシア代表が欠席する状況の下で、インドネシア出身の妻がいる寒川は、最悪の結果、例えば、今後インドネシアに入国禁止になる可能性、妻に付き添ってインドネシアの親戚や友人を訪問できなくなる可能性が予想されるにもかかわらず、それらをかえりみず、毅然として思い切った行動に出たのであった。世界華文作家大会会場で、彼が、自分が見聞きしたことを伝えて、インドネシアで発生した華人に対する残忍で非人道的な行状を証拠立ててくれた。その結果、世界華文作家大会が、英中2言語による「世界華文作家によるインドネシア排華暴行に対する厳正な抗議」の声明を出すに至ったのであった。

(3) 寒川のインドネシアおよび華文作家仲間への情

ようやく、インドネシア華文文芸に、百花繚乱の春が訪れた。華文の刊行物は堂々と輸入できるようになった。それでも、寒川はなお、インドネシアを訪問する度に重量超過になっても、重い書籍を運んできては、インドネシアの作家仲間配布し続けているのである。これはまさに、袁覲が『私の知る寒川』において、「寒川は、数十年来の一貫した精神を変えることもなく、毎回大きな包みの華文書籍を持ってきては、インドネシアの作家仲間配布していた。皆が受け取り、皆が喜んでいた。」と述べた一文そのものである。

寒川は、インドネシアの作家仲間たちから贈られた本を、非常に大切にしていた。寒川夫人が会話の中で洩らしていたことだが、一度荷物が重量オーバーになり、60シンガポールドルを徴収されたことがある。寒川は、作

家仲間の努力の結晶を捨てるわけにいかなかったのである。そこであるエピソードが思い出される。1人の海外の作家が、ジャカルタを離れる際に、別の場所にも行かねばならないという理由で、インドネシア華文作家仲間から贈られた書籍を人に預けたことがあった。しかし、その作家がその後何度ジャカルタを訪れても、本を預けていることを「忘れた」まま、一度も持ち帰ることはなかったのである。この作家は寒川とは異なり、毎回のジャカルタ訪問時に、作家仲間へ贈るための本を持参したこともなかった。その作家は、ジャカルタに来るたびに作家仲間を訪問するのであるが、毎回創作経験について、話をするだけであった。

尊いと思えることは、寒川が一度も傲慢な態度を見せたことがなく、インドネシアの各種集会や座談会に招待されても、主催者側の資金繰りが容易ではないことを考慮して、主催者側が提供するシンガポールからの交通費も受け取らなかったことである。主賓として招かれた際も、インドネシア華文作家協会からの優待を他の作家仲間とシェアしていた。自分の妻にはジャカルタにある実家に宿泊させ、作家仲間をホテルの同室に宿泊させた。その目的は、作家仲間の出費を抑えるためである。他の例では、ガルー（訳者注：西ジャワ州にある小都市）の中秋節の交流会が、現地の地震のためにキャンセルになった時のことである。寒川は早いうちから航空券を予約し発券しており、予定通り、夫人と共に現地に訪れ、インドネシア華文作家協会が主催する文学の会に招待された。協会の袁覲主席が言うには、事前に協会が航空券代金を支払うと申し出たのに、寒川が断ったとのことであった。シンガポールに戻る前日まで、寒川は滞在していた1週間のホテル代金について話題に出すこともなかったという。何とも尊い話である。

2006年、メダンの孫国静という作家仲間が、シンガポールを訪問する知人に依頼して、寒川に3百米ドルを手渡し、メダンで開催される文学会議に招待したい旨を申し出た。しかし、寒川はそれを受け取らなかった。双方が

長い話し合いを経た末、最終的に折衷案に辿り着いた。寒川の提案で、その3百米ドルは、シンガポールのブキティマ瓊崖聯誼会（訳者注：中国海南島出身者による同郷会）の傘下にある海南作家作品研究室に寄付をするということになった。その後、メダンの文学会議の開催時に、孫国静は、寒川の最近の作品である『私は金門から来た』を40冊持参するように依頼した。孫国静は、それを買い取り、会議の賛助人に贈りたいと考えていたのである。半額で計算したとしても、寒川は5百シンガポールドルを得ることができたのだが、寒川は孫国静には本を売らず、無料で大会に贈呈したのであった。

現在、定年退職をしている寒川は、かつてのような安定した収入は得ていない。しかし、インドネシアの老作家が病氣だと聞けば、すぐさま治療費として5百シンガポールドルを送った。できる限りのことをしようと、募金活動も行った。彼が人情を重んじることは、皆が褒め称えていることである。そして、30年あまり前のことが思い出されるのである。30年あまり前、インドネシアの華文作家仲間が、数冊の指定した本、画仙紙、筆と硯、篆刻の代購を寒川に依頼し、寒川は半年分の給料を使って購入した。それらを無事ジャカルタに持ち込んだ際に、その作家が支払をしようとすると、寒川はそれを手土産ということにして、経済的に裕福ではない作家から金を受け取らなかったのである。このことを、寒川夫人が会話の途中で洩らさなければ、私たちが知ることもなかったのである。寒川が、わが身のことも友人の喜びを大切にしている性格は、一貫して変わらない。

寒川はインドネシアの土地を愛し、インドネシア華文作家仲間と誠実に向き合ってきた。その人となりは30年あまり一貫して変わらない。2008年、私が翻訳した、中国語とインドネシア語の2言語による寒川の詩集『トバ湖の恋歌』は、103首の詩の大半がインドネシアの景物を題材にしたものとなっている。寒川は、この詩集の出版発表会を8月17日に実施することを希望していた。私は、彼がインドネシアの建国記念日を新書の発表日

として選んだ気持ちが理解できる。その前にも、彼は2冊の著作を出版した。それら『雲樹山水の間』（1997年）および『金門シリーズ』（2000年）もまた、インドネシアの重要な記念日を発表日として選んだ。前者はインドネシアの旅行記である。そこには、インドネシア華文文壇に関する文章が多くみられ、彼は文中でインドネシアとの縁を語っている。素晴らしい作品だ。

インドネシア華文作家仲間がシンガポールを訪れた際には、寒川はどんなに多忙でも、時間を作って彼らと会うようにしていた。彼がまだ仕事をしている頃でも、遠方からシンガポールを訪れた友人に会うために、昼休みを犠牲にしたり、仕事が終わってからの遅い時間に疲れた身体で友人のところまで駆けつけたりすることがよくあった。ある時、スラバヤの作家仲間が、シンガポールでストップオーバーした際、夜の10時に寒川に電話を掛けたことがあった。当初は、電話の挨拶だけのつもりであったが、その知人が翌朝シンガポールを発つと知った寒川は、翌朝の仕事があるにもかかわらず、即座に車を運転して顔を見に出向いた。寒川を知るインドネシア華文作家仲間の数は多い。作家仲間、名前だけ知っていて面会を求めるインドネシア華文作家の来訪は後を絶たない。寒川の友人の範囲は、インドネシアだけではなく、中国、香港、台湾、マカオ、アセアン諸国などと幅広く、頻繁にこういったことが起こっていることは想像に難くない。しかし、彼は友人たちをないがしろにすることはないのである。

2004年12月、インドネシア華文作家協会が、バンドンにて「第9回アセアン文芸キャンプ」および「第5回世界短編小説セミナー」を主催する機会に乗じて、寒川、東瑞（訳者注：本名は黄東涛、インドネシア生まれの華僑で、現在は香港在住の華文作家）とモハメッド・アミン（訳者注：インドネシアの華文作家）に対して、その卓越した功績を表彰することとなった。これは、彼の40年近くにおよぶインドネシア華文文壇に対する支援と推進が評価されたものであり、寒川にはふさわしいものである。

2009年12月12日、寒川は、インドネシア華文作家協会の10周年式典に招待され、簡潔な祝辞を以下のように述べた。「……私は、インドネシア華人作家協会が歩んできた道について、様々な感情を持っています。辛さ、陽気な笑い声、誇らしさを思います。10年が経過して、これからもこの道を、私はインドネシア華文作家仲間と共に歩んでいきたいと思っています。永遠に！」寒川は、インドネシア華文作家仲間を大切にしている気持ちを口先だけで言っているのではない。彼のこれまで数十年におよぶ行動、その間違いのない事実が、嘘ではないことを証明している。インドネシア華文作家協会の10周年に当たって、私はインドネシア華文作家仲間たちが歩んできた困難な歳月と、その辛い時間が流れる中で、インドネシア華文文壇と作家仲間を陰ながら支えてきた寒川に思いを馳せるのである。寒川、それが長く記憶に留めおくべきインドネシア華文史書の功労者の名前である。



南洋華僑中学の先輩でもある故王鼎昌シンガポール大統領（写真左）と会話をする寒川（写真右）。人民協会にて勤務していた寒川が、当時、故大統領が議員をしていたことのある選挙区の慈善活動の刊行物の編集に携わった。



2011年3月、寒川(写真右)は、夫人(写真右二)とともに、特別に飛行機で、インドネシアのソロに住む老作家の黄東平(写真手前)を訪ねた。寒川は、2度わたり、黄東平のために合計5,950シンガポールドルを募った。



寒川(写真右二)は、数名の「アセアン文芸」の編集担当者と共に、2013年10月にクアラルンプールで開催された「世界華文作家大会」に参加し、アセアン地域の文芸交流の重要性について論文を発表した。



「第14回アセアン華文文芸キャンプ」でスピーチをする寒川(写真右)